窪町だより

窪町小学校令和５年度１２月号

窪町小学校ホームページ　URL: http://www.bunkyo-tky.ed.jp/kubomachi-ps/

「支え合う」ために

西幅　孝弘

先月、転入してまだ間もない一年生が、下校のときに自宅の近くで涙していたことがありました。そのときに通りかかった高学年の子どもたちは学校に連絡をして、先生や保護者の方が来るまで一緒に待っていてくれました。一年生は心強かったことでしょう。何か予定も入っていたかもしれませんが、それでも放ってはおけなかったのだと思います。

全国学力学習状況調査には「人が困っているときは進んで助けていますか」という質問項目があります。本年度「当てはまる」と明確な回答をした窪町小の児童は 60.6%、全国平均は 45.6%、東京都の平均は 44.8%です。「どちらかといえば当てはまる」を合わせると窪町小は 94.9%です。

家庭の中で社会の中で6年間の学習の中で、だれかが困っているときに手伝うことの重要性を子どもたちは理解し、行動にうつしたいと考えているのだと思います。本校では教育活動の中で育みたい児童の姿の一つに「人を大事にする」という姿勢を掲げています。感染症の流行から数年、国際社会は混乱が続き、社会全体が柔軟性を欠き、不寛容さが見え隠れしているからです。

本校での学びの一例を挙げます。先月3年生は「ふれあい給食」で祖父母の方との交流を行いました。子どもたちは心を込めた計画と準備に余念がありませんでした。その後、高齢者疑似体験を行い高齢の方々のことを深く考えようとしました。さらに、認知症サポーター授業を受けることができました。この有機的な一連の学習内容も「困っている人がいたら助けたい」という思いにつながっていくのだと思います。なぜなら、取組はどの場面を切り取っても子どもたちの表情が真剣そのものだからです。このような活動が6年間少しずつ重なり他者を思いやる温かさが増していくのだと感じています。

社会の変化が激しくなろうと、私たちは立ち止まり、翻弄されることなく、「困っている人がいたら助けよう」とする温かい気持ちをもった児童の育成に努めます。

だれかが発する「困っています。」という小さく不明瞭なメッセージであっても受け止めることのできる力を育てたいと考えています。

同時に、自分が困っているとき、悩んでいるときに一人で抱え込むことのないように「SOS」を伝えることができる力も大切に育んでいきます。

事務室より

（事務室　増田）

事務室の仕事について、その一部を紹介します。事務室では日常の学習だけでなく、さまざまな行事の際に必要な物品も準備しています。運動会に始まり、校外学習や展覧会など 2 学期は大きな行事もたくさんあり、1年間で最も教育活動が充実する時期です。

そんな活発な教育活動に迅速に対応できるよう、事務室は日々職員室や主事室と連携を取りながら、子どもたちの学校生活を支援しています。

総合的な時間（高齢者）

（3 年担任）

3年生は、2学期のくぼまちタイムで「共に生きる」の学習に取り組んでいます。子どもたちを取り巻く社会には、様々な人がおり、その様々な人々が関わり合うことで社会は成り立っています。今回は、子どもたちにとって身近な「高齢者」に焦点を当てました。お年寄りの体の特徴や、自分達との違いに興味をもちながら、車いす体験や高齢者疑似体験セットを使っての体験活動、認知症サポーターキッズ養成講座などを通して様々なことを学びました。また、学んだことから自分でテーマを決めて、調べ学習も行っています。この学習をきっかけに、様々な人と共にどう生きていくか、子どもたちと一緒に考えていきたいです。

食育について

（給食主任　今泉　菜穂子）

ここ数年、新型コロナウイルス感染症の感染状況を鑑み、学校給食を通しての交流の行事は中止になっていました。今年5月に5類感染症に変更となり、本校の教育活動においては、3年生が自分の祖父母を学校に招待し、ふれあい給食（交流給食）を行うことができました。

学校給食のみならず、これから迎える年末年始にかけて、家族や親戚、仲間と食卓を囲んでコミュニケーションをとりながら食事する機会がますます増えると思います。子どもは、仲間や家族と食べる場を共有することで、「いただきます」「ごちそうさま」などの挨拶が身につくだけでなく、食事のマナーを教えることで、相手への配慮や思いやる心の育成につながります。

生涯にわたって食べることを通して豊かな生活を作っていくための基礎作りに、学校給食が役立てればと願っています。まずは今までできなかった多様な活動を充実させていけるよう努めていきます。